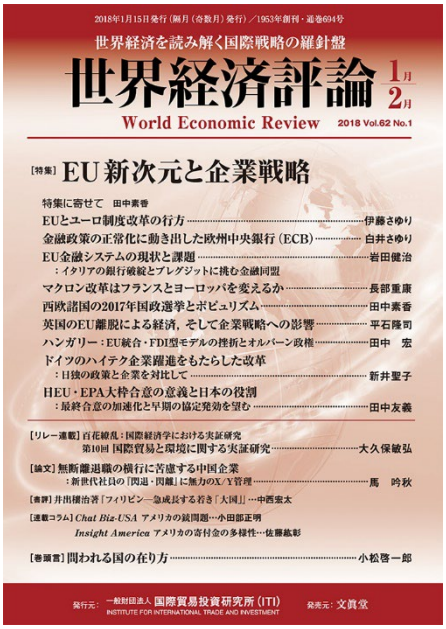
Back Number

本論文は

世界経済評論 2018 年 1/2 月号

(2018 年 1 月発行)

掲載の記事です


2018年1月15日発行（隔月（奇数月）発行）／1953年創刊・通巻604号

世界経済を読み解く国際戦略の羅針盤

世界経済評論 1月 2月

World Economic Review 2018 Vol.62 No.1

[特集] EU新次元と企業戦略

特集に寄せて　田中素香

EUとユーロ制度改革の行方……伊藤さゆり

金融政策の正常化に動き出した欧州中央銀行（ECB）……白井さゆり

EU金融システムの現状と課題……岩田健治

：イタリアの銀行破綻とブレグジットに挑む金融同盟

マクロン改革はフランスとヨーロッパを変えるか……長部重康

西欧諸国の2017年国政選挙とポピュリズム……田中素香

英国のEU離脱による経済，そして企業戦略への影響……平石隆司

ハンガリー：EU統合・FDI型モデルの挫折とオルバーン政権……田中　宏

ドイツのハイテク企業躍進をもたらした改革

：日独の政策と企業を対比して……新井聖子

HEU・EPA大枠合意の意義と日本の役割

：最終合意の加速化と早期の協定発効を望む……田中友義

[リレー連載] 百花繚乱：国際経済学における実証研究

第10回 国際貿易と環境に関する実証研究……大久保敏弘

[論文] 無断離退職の横行に苦慮する中国企業

：新世代社員の「閃退・閃離」に無力のX/Y管理……馬　吟秋

[書評] 井出穣治著「フィリピン―急成長する若き「大国」」…中西宏太

[連載コラム] *Chat Biz-USA* アメリカの銃問題…小田部正明

Insight America アメリカの寄付金の多様性…佐藤紘彰

[巻頭言] 問われる国の在り方……小松啓一郎

発行元：一般財団法人 国際貿易投資研究所（ITI） INSTITUTE FOR INTERNATIONAL TRADE AND INVESTMENT　発売元：文眞堂

世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊＝7,920円 ▶ 6,600円 税込

17% 送料無料 OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読期間中 デジタル版バックナンバー 読み放題!!

世界経済評論　定期購読

[24時間・年中無休]

0120-223-223

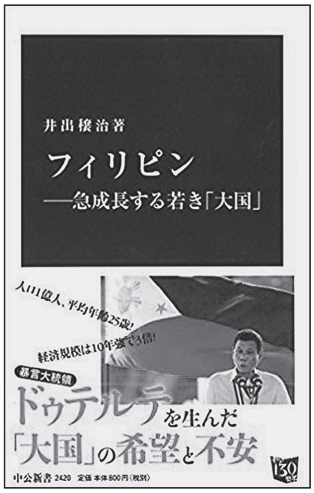
お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp 雑誌のオンライン書店

フィリピン
―急成長する若き「大国」

国際機関日本アセアンセンター　中西 宏太



［著者］
井出穣治（いで・じょうじ）
　日本銀行職員
［発行］中央公論新社，2017 年 2 月
［判型］新書・タテ組，220 ページ
［定価］本体 800 円＋税

近年，フィリピン経済が好調である。

IMF でフィリピンを担当した日銀マンである著者は，本書で「常識とは異なる新しい経済成長モデル」を提示して，フィリピンの経済成長の解明にチャレンジしている。かつてフィリピンは「アジアの病人」と呼ばれ，東アジアの経済発展から取り残されていた。著者はその理由として，工業部門での輸入代替から輸出振興政策への転換の失敗に注目しながら，いわゆる東アジアの雁行・キャッチアップ型の工業化を行わ（え）なかったことを指摘している。そして，近年のフィリピンが「アジアの希望の星」となっている理由を，サービス業主導による新しい経済成長モデルによるものだと訴えているのである。

フィリピン経済の特徴として，低所得国段階でありながら GDP のサービス業割合が 60％と高く，個人消費が GDP の 70％を占める点，いわゆるフィリピン人出稼ぎ者からの送金額が GDP の 10％に匹敵する点，昨今の BOP 産業の発展で 2015 年には 100 万人以上の雇用を擁するなど，工業製品ではなくサービス輸出に依存する経済構造をあげ，著者はフィリピンが東アジアで一般的に語られてきた雁行型工業化モデルとは違う軌跡，特徴をもっていることを示している。農業から工業，そしてサービス業へと進む発展パターンではなく，農業からサービス業へ飛んで行ったパターンである。これをどう理解するべきなのか。そこにどんなビジネスチャンスがあるのか。工業化こそが経済成長のエンジンだと信じてきた私たちに，著者は問いかけているのかもしれない。

分析の守備範囲は広い。昨今の地域研究や国別経済分析が分野別に細分化され過ぎていることへの反省から，ダロン・アセモグルが唱える包括的な政治経済制度よろしく，歴史，政治，経済の各領域のキーワードや理論を網羅的に抑えている。大局的な観点から個々の領域を統合し，ひとつの物語を作るべく，「フィリピン」を丸ごと理解・説明しようと試みているのである。植民地支配の政治経済的弊害，根深い財閥支配，農地改革の停滞，外国企業の影響，大統領制のもとでの弱い官僚機構，近年好調なマクロ経済事情，期待される人口ボーナス，そして，南シナ海での対中国外交からマルコス，アキノ，ドゥテルテと歴代大統領の政策等々，幅広いトピックスから説明を試みている。新書という紙面の制約はあるが，その分，記述がコンパクトにまとまっているので，今のフィリピンがどうやって形成されてきたのか，今後どうやって発展していこうとしているのか，その課題は何か等を理解できる良書である。

それにしてもフィリピンの経済発展のモデル化は難しい。フィリピンに駐在経験のある評者にとって，フィリピンが他のアジアとは違う政治経済社会構造と発展パターンをもっていることは，直感的にもわかる。しかし，そういった経済発展モデルが，果たして人口 1 億人の「大国」で成立しうるのか。アジアの実験とも言えるフィリピンに益々，興味が湧くところである。

（なかにし　ひろた）